

給食スタッフとの協働による柔軟な「おやつ時間」の創造 職員間の役割分担と会話の分析から

○ 栗原 啓祥
(認定こども園清心幼稚園)

境 愛一郎
(共立女子大学)

1. 研究の目的

幼稚園での預かり保育の実施やこども園化により、「午後の保育」(無藤, 2004) がますます一般的なものとなりつつあり、その充実や実践的な位置づけを検討することが急務となっている。合わせて、午後に関食を提供する「おやつ時間」を設けた保育も広がりつつある。こうした時間帯では、保育認定の違いなどにより子どもの生活が幾重にも枝分かれするため、職員の配置・配分の修正をはじめとした柔軟な対応が必要と考えられる。しかし、「午前の保育」や「給食」と呼ばれる時間と比較して、以上のような時間を対象とした研究および実践報告は乏しい現状にある。

本稿では、保育者と給食スタッフが協働で運営する対象園の「おやつ時間」(次章参照)に着目する。とりわけ、その要となっている給食スタッフを中心に生じる相互のやりとりについて分析することで、同園の「おやつ時間」を成り立たせる構造や各員の役割について明らかにする。また、以上を通して、より柔軟な「おやつ時間」の在り方について考察したい。

2. 対象と方法

(1) **対象園**: 幼保連携型認定こども園清心幼稚園(前橋市(以下、清心))。2015年に幼稚園から幼保連携型認定こども園に移行し、同時に給食施設を新設した。ただし、おやつに関しては、2007年に幼稚園の敷地側に併設した認可外保育施設において、給食スタッフのB氏(栄養士・パート)を迎えて提供していた経緯もある。認定こども園に移行後は、A氏(栄養士・正職員)とC氏(調理師・パート)の2名が新規で加わった。現在はA氏が中心に献立作成を行い、B氏とC氏は相談や助言というかたちでそれに協力している。清心では、教育標準時間終了後、異年齢混合保育に移行する形態をとっており、おやつも各年齢の子どもたちが交じり合った状態で提供される。「おやつ時間」は通常15時から15時45ごろまでに設定されており、その時間内で子どもが自ら食べるタイミングを決定し、おやつ会場となっている保育室にやってくるカフェテリア形式を採用している。その際は、保育者だけでな

く給食スタッフも保育室に入り、協働でおやつ提供に関する業務にあたることになっている。

(2) **データ収集**: 2018年11月(予備調査)と2019年4月から2019年7月までの期間(本調査)、「おやつ時間」中の子ども、保育者、給食スタッフの様子を定点カメラで記録した。定点カメラは、おやつを提供する給食ワゴンを中心に、保育室全体の様子が把握できるように設置した。記録は月2~3回程度、計13日にわたって実施し、1回あたりの映像は約30分~40分、長いもので56分30秒だった。撮影にあたっては、当事者に事前説明を行い、研究協力への同意を得た。

(3) **分析方法**: 映像記録中にみられた給食スタッフ、保育者、子どもの三者間の会話を文字起こし、2段階のコーディングにより《大カテゴリ》<中カテゴリ>に整理した。その際、一時分析として2018年11月の映像の会話のやりとりについて分析した結果、本研究では「給食スタッフ-子ども」「給食スタッフ-保育者」「保育者-保育者」のやりとりに注目して分析することにした。

3. 結果と考察

(1) **結果の概要**: 分析の結果、清心では、給食スタッフが保育者と協働して「おやつ時間」に参加することで、通常の保育場面とは異なる多様な関わりが確認できた。「給食スタッフ-子ども」においては、<遊び的な関わり>の場面、「給食スタッフ-保育者」においては、<レシピ交換>や<労り>、「保育者-保育者」においては、<一時的な休息>である。これらは、通常の保育時間中では見られないものであり、給食スタッフ、保育者、子どもにとって有意義な「おやつ時間」を構想する上で検討する意味がある。本稿では、以上の組合せごとのやりとりの特徴について概説する。

(2) **「給食スタッフ-子ども」とのやりとり**: この二者の間では、主に《食事マナー》、《配膳・片付け援助》、《ヒアリング》、《おやつ情報の提供》、《食以外の関わり》といったやりとりが生じていた。

《食事マナー》に関するやりとりは、「Sくん、おやつどうするのー? おてて洗っておいで」と手洗いを促

すく食事前の準備>や、「おすわりして食べてください」などの<食事中の姿勢>に関することが多く、子どもへの一方的で形式的な指示が中心であった。しかし、《配膳・片付け援助》に関する会話では、2歳児に対して「Hくん、両方持てる？気をつけてねー」と言いながら、子どもと一緒に飲み物を席まで運んで「じゃあ、ここにおきます」と子どもへの<配膳援助>をしたり、「(Y男に) それぞれ、お片づけしよう」「ここをお願いします」と食べた後のお皿を片付ける場所を案内したり (<片付け援助>) するなどの個別的な関わりによって、子どもが自ら配膳や片付けができるように援助していた。こうしたやりとりは、2歳児の間ではより多く、細やかに行われており、子どもの育ちにに応じて丁寧な言葉がけも行われていた。

《ヒアリング》に関するやりとりは、「(U男に) 美味しかったー？」<食べた後の感想の確認>と、食後間もなく子どもに直接尋ねたり、なかなかおやつを食べに来ない子どもに、おやつを食べるのか、食べないかを確認したりするものがあつた。また、《おやつ情報の提供》に関するやりとりは、おやつ作りに関するものが多く見られた。例として、ミルクもちが提供された日の場合では、「どうやって作ったー？」という3歳児のR男の質問に対して、A氏が「片栗粉と、牛乳と、砂糖を入れて、まぜまぜまぜーって、して作ったん。最後にきな粉まぶしたんね」と動作を交えながら丁寧に応答していた。また、今日のおやつは何か、お代わりができるかできないかといった情報を子どもに対して伝える場面も見られた。

食事と直接的に関係のない《食以外の関わり》では、4歳児のU子が、B氏に徐々に近づき、後ろ側に回った後、肩もみを始める場面などがあつた。その際、B氏は一瞬驚いたような表情になったあと、「あー気持ちいい、気持ちいい」と笑顔を見せる。すると、次にU子は、隣にいるA氏の後ろに回って、A氏の首のあたりを触りはじめる。A氏は「私はくすぐったいー」と嫌がるそぶりを示す。U子は、A氏からすつと離れると、再度B氏に近づいて肩もみをはじめ。おやつ時間では、子どもが三々五々に集まってきて食べ始め、食べ終わるスタイルであることから、子どもも給食スタッフも偶然に手が空き、以上のようなちょっとした<遊び的な関わり>が起こることも見られた。

(3)「給食スタッフ-保育者」とのやりとり：給食スタッフと保育者の間では、《確認作業》と《専門性リスペクト》に分類できるやりとりが見られた。

《確認作業》に関するやりとりは、個々の子どもがおやつを食べにきたかどうか、個人が持参するコップ

などの持ち物の場所の確認、子どもが帰宅したかどうかなど、個別におやつを食する状況下ゆえに生じる確認作業が多く起こっていた。その際、給食スタッフはすべての子どもの名前と顔とが一致しており、さらに、どの子どもが食べに来ていないかも把握していた。また、おやつ時間に早く来たり、遅く来たりする子どもの傾向とメニューの関係もつかんでいた。

《専門性リスペクト》に関する会話は、新しいメニューや、保育者にとって関心のあるおやつが出た際に、給食スタッフに作り方を尋ねる場面 (<作り方の質問>)、大量におやつを作っている給食スタッフへ労いの言葉をかけたりする場面などが見られた (<労り>)。また、保育者が「ミルクもち、大人気ねー。さっきね、子ども同士の会話で『今日、ミルクもちだよー、やったー』『あれっておいしんだよねー』って声が聞こえてましたよ」と、子どもの声を給食スタッフに伝えるなど、その日の「おやつ時間」の充実ぶりを積極的に共有しようとしているやりとりも見られた。

(4)「保育者-保育者」とのやりとり：保育者間にみられた特徴的なやりとりとしては《一時的な休息》があげられる。清心では、給食スタッフが配膳や片付けの補助を担当することにより、保育者が役割から解放されることがしばしばある。その際、手の空いた保育者は、子どもの輪の中に入って、子どもと一緒におやつを食べるが、その際に、そうした保育者同士で会話が発生することもある。そこでは、自然と「美味しい」という声が飛び交い、その場の雰囲気が和やかで協働的な関係の構築が保育者同士だけでなく給食スタッフへの波及する効果があると考えられた (<同僚性>)。

4. まとめと課題

「おやつ時間」は、子どもにとって、単なる栄養補給としての意味だけでなく、充実感得ながら、食への関心を広げる場でもある。本研究では、給食スタッフが参加し、子どもや保育者と相互にやりとりしながら営まれる「おやつ時間」の中で、日常ルーティン化された会話だけでない三者間の多様かつ柔軟なやりとりが生まれていることが明らかとなった。子どもと給食スタッフとの間に起こる<遊び的な関わり>や、給食スタッフと保育者との交流<作り方の質問>は、給食スタッフが、子どもや保育者にとって、ともに息抜きができる存在であり、「子ども-保育者」という二者間での生活をリフレッシュするような役割が期待された。

今後より多様な「おやつ時間」を対象とした検討を重ね、食べることを中核とした豊かな交流の場としての可能性を展望していきたい。